十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080　帯広市東1条南8丁目
電話=編集㉑2121、広告
㉓2323、総務・販売㉓2222
©十勝毎日新聞社 1985

目指せ宇宙基地 ④

広大な面積が必要
当初の候補、大樹だけ

北東公庫構想

新たな宇宙基地構想のそもそもの発端は、西側先進諸国の首脳のサンサミットで、米国のレーガン大統領が一九九〇年に宇宙衛星スペースラブを打ち上げたい―とする新宇宙時代構想を示し、西側諸国に協力を要請したことから急に具体的には宇宙工場を意味する壮大な宇宙計画といえよう。無重力、高真空、極低温など地上とはまったく違った宇宙空間で、まずラジオの研究としてすぐれた半導体をつくり、さらに新素材の研究など新技術の可能性を探究する。それからもう一つは、バイオテクノロジーの研究であり、新薬とか遺伝子組み替えなどの実用化を目指すもので、いずれも本道が二十一世紀展望として

くから航空宇宙産業構想を練っていた政府系金融機関の北海道東北開発公庫が世話役になって研究会をつくることになった。

それではこのスペースラブとはいったい何かというと、これは実験室であって、将来当然これに参画しなければならないということになった。

それが、いち早く道の新長期計画構想に取り上げられたことで道民の関心を呼び、早くも航空宇宙産業構想の可能性を探究する。それからもう一つは、バイオテクノロジーの研究であり、新薬とか遺伝子組み替えなどの実用化を目指すもので、いずれも本道が二十一世紀展望として

北海道工業大学学長
松本　正さん（56）

いま最も重要視している問題や通信衛星が打ち上げられているが、スペースラブのような大型ロケットの打ち上げが港ができず、用地も狭い。

新宇宙基地には五千㌶以上の広大な面積が必要とされて子島ではとてもその条件を満たせない。さらに漁業交渉で

二月と八月にしか打ち上げられないことになっており、何かと問題が多い。

このため広大な工業用地が売れなくて困っている苫小牧がいち早く誘致の名乗りを上げ、十勝の大樹町も手を挙げているが、実は北東公庫の最初の道内での航空宇宙産業構想では大樹町がその有力候補地に挙げられ、苫小牧は考えられていなかった。

苫小牧は確かに広大な工業用地が確保され、港湾も整備されていて条件は整っているが、地耐力が弱いほか、新千歳空港の管制規制を受けるという問題を抱えており、私どもの道工大で目下、立地の可能性を洗い直しているところだ。新千歳空港から半径二十四㌔以内は高い建物の制限区域になっていて、苫東工業基地への発射台の建設にはまず無理があり、二十四㌔圏外となると沖合十㌔にもおよび人工島が必要になる。それには海底の強い地耐力が前提になり、十㌔以内や人工島周辺の漁業補償も大きな問題だ。

大樹町についてもまだ調査したことはないようだが、地耐力は苫東より強いようだし、面積も広いようだが、後背地との関係をみると、苫小牧は工業都市で札幌がその後背地になっており、農業基地の大樹より条件が良さそうだ。いずれにしてもまだ候補地を特定するような段階ではなく、基礎調査や後背地との関係などあらゆる角度からの調査点検が必要であり、これからその調査研究が始まろうとしているところだ。霧がかからないとか、風が弱いなどの気象条件も立地上の大きな要素になり、地元の熱意も大事なバロメーターになろう。

（つづく）

〈略歴〉昭和十三年、北大工学部電気工学科卒。十六年北大助教授、二十七年教授。五十四年道工大電気工学主任教授、五十九年四月学長に就任。